

# ロバト・ブラウニングの悲劇「露台にて」

三 谷 正

## (一) 序

### (二) ノーバトとコンスタンス

- (1) 純情のノーバトと因襲に抵抗するコンスタンス
- (2) 日の出の勢いの運勢の星ノーバトと恋敵の心の奥を見抜くコンスタンスの執念
- (3) 権勢に目も呉れぬノーバトの愛

### (三) 女王とコンスタンス

- (1) 女王の姥桜の歎き
- (2) 女王の老らくの恋

### (四) 青春の恋と老らくの恋

- (1) 一生に一度の真剣な青春の恋
- (2) 老らくの恋は青春の恋に勝てず

## (五) 結 び

## (一) 序

この劇は若者ノーバト(Nobert)と若い女性コンスタンス(Constance)との青春の恋に、コンスタンスの従姉である女王のノーバトへの老  
ロバト・ブラウニングの悲劇「露台にて」

らくの恋を結び合せた劇である。ノーバトが女王に仕えたのは、かれが想いを寄せるコンスタンスに近づき、恋を成し遂げ、女王の許しを得て結婚するためであった。かれは女王の外交官として手腕をみせ、外国との交渉に成功する。女王はこれを喜び、かれの手柄を称える祝宴を催す。かれはこの汐時を利用してコンスタンスとの結婚の許しを得ようとする。しかしコンスタンスは女王に率直にこれらの結婚の許可を申し出ることは拙いとし、一つの策を勧める。かれはその勧めに従って女王に申し出る。所がかれらの意図に反し女王の反応は意外である。女王はノーバトの言葉を真に受け、わが世の春が立ち帰ったと喜び、前の不幸な結婚を破棄してかれと結婚する気になる。そこでコンスタンスは自らの恋を諦めて、かれを女王に譲ろうとし、自ら進んで女王にかれの女王に対する恋は真物であると言う。これに驚いたかれは、女王の夫となり王になるような野心は微塵もなく、飽く迄もコンスタンスとの恋に生きる決意を述べる。そして女王の機嫌を損ねた場合の結果の如何に頓着せず、女王の目前でコンスタンスに対する情熱的愛を力強く訴える。これを知った女王は幸福の絶頂から絶望の谷底へと突き落され、無言のまま露台から姿を消す。その時宮廷の内部に響き渡る舞踏会の音楽が突然止む。女王の衛兵の足音が近づく。二人は差し迫る運命を感じず。その瞬間二人の愛は最高潮に達し、二人は永遠に堅く結ばれ、女王の罰を共に受けることも本望と思う。この劇において青春の恋に老らくの恋を結び合せた点は古典的香りがあり、またコンスタンスが恋人と女王が体面〈respectability〉に因われる人間として両者を巧みに操る所はメロドラマの面白さがある。併しわたくしの心を打つのは三人の登場人物即ち恋に焦がれるノーバト、恋の杞憂に悩むコンスタンス、老らくの恋風を吹かせる女王に就いての精緻な心の動きの抒情的表現、而もその表現に比喩的、象徴的手法を交えるブラウニングの筆の冴えである。またブラウニングが絵画、音楽の芸術の理想美を憧れながら、他面では現実には眞実を求め、実人生を見詰めて生き生きとした血の通う愛の現実美を重視する所もこの劇の強い魅力である。ここにこれらを台詞に従って鑑賞してみたいのである。

## (二) ノーバトとコンスタンス

### (1) 純情のノーバトと因襲に抵抗するコンスタンス

ノーバトとコンスタンスは女王の催す祝宴から抜け出して露台で密談し、かの女はかれに結婚の意志を伝える。かれはかの女の返事を待ち焦がれていたので嬉しさの余りに直ちに女王の許可を求めに行こうとする。かの女はそれに反対する。かれは情熱を込めて反撥する。「女王にお

願いに行くのを止めるなんて、そなたは世界一の残酷者。僕を一刻も早く行かせてくれ。今なら僕の言うことは何でも女王はお許しになる。女王の許可なしでどうして僕はそなたをわがものとすることが出来るものか。女王は彼処あそこで僕を待っていていらっしゃる。そなたは此処ここで待っていてくれ。これはいつかはお願いせねばならぬことなんだ。今こそその機会だ。今を差し置いては機会はない。僕の胸は張り裂けそうだ。僕はそなたをどんなに愛していることか。僕の愛の捌はけ口ぐちを与えてくれ。そなたが僕のものであることを知らせてくれ。そなたが僕のものだということをはっきりさせてくれ。そなたの額に僕の名を書いてくれ。そなたをしっかき僕のものとし、そして神の思おぼし召ししなら僕の心を満足なものにして死なせてくれ<sup>⑧</sup>。然るにかの女はかれが女王の許可を飽くまでも求めようとする態度に立腹りつぷくして言う。「あなたの言う通りにしなければ、わたしはあなたのものでないと言うの。どうすればあなたを満足させられるの。わたしの身体からだがあなたの身体からだに変わってしまったわたし、あなたの心臓の中にわたしの心臓が飛び込んで、わたしの心臓はあなたの心臓と共に鼓動し、わたしの手も眼も髪も、わたしのすべてがあなたのものに変ってしまったこのわたし、しかもそれを完全にしたために、わたしの心もあなたの心と成り切ってしまった、女らしい弱々しい気持を振り捨てて男みたいに強い気持になり、あなたがわたしを愛しわたしがあなたを尊敬することを世間が知ったとて、そんな些細なことに怖おそじ気けないようにと言っているこのわたし、このわたしがあなたのものでないと言うの。しかも世間はまだ知らないけれど、あなたはわたしというこの女をあなたの女⑨にしてしまっているくせに、世間を憚はばかかって女王の許しを乞うというの、そんなら行きなさい。そうなの、宮中の評判だの、世間の見栄など愚にもつかぬことを拾い上げて気にするの<sup>⑩</sup>。かの女はかれを宮中の評判とか世間体を気にする愚かな男と思ひ込む。

(2) 日の出の勢いの運勢の星ノーバトと恋敵こいの心こゝろの奥を見抜くコンスタンスの執念

かの女はかれと世間体に就いて問答を繰返す間に、かれは事のけじめを望むだけで決して世間体を気にする男でないことが分かり、請願に賛成し今迄と打って変わってかれを褒めて「あなたは女王の秘書であり、女王一番のお気に入り、これも理由がないではない。今夜あなたの素晴らしい一年間の仕事しごとが完成するのですもの。この宮中の祝宴もそれを祝っての催しです。女王一生の成功が実現されたのですわ。女王の宮廷が昔から夢みて来たことが動かぬ事実となり、これを記念しての今夜の祝宴ですわ。この称賛は誰のための称賛ですの。多くの人の心を狂わんばかりに驚かし騒さわぎ乱みだす大仕事を誰の天分、忍耐、精力が成し遂げたの。外ならぬあなたでしょう。あなたこそこの成功をもたらした運命の神よ。今こそあなたの運勢の星は日の出の勢いというものよ。この成功に報いるのは女王の番よ。あなたへの褒美のほめことをお願いしなさい。そして過

去をしっかりと握り、それに未来を繋ぎ、腕を差し出して太陽に触れ太陽を掴み、あなたという大地にいつも太陽が顔を充分に向けて眺めるようにし太陽の生命を絶対にあなたのものにするのよ。そして女王が許したくない唯一一つのものを選ぶのよ。それをはっきり言うことが却って重みがあるに傾いてあなたが女王の成功に尽した仕事と釣合うのよ。女王だって出来ることなら結局はお許しになるわ。わたしがあなたを選んで欲しいのは勿論女王の従妹のわたしとの結婚のことよ」と。所がかの女はこのように請願に賛成しながらも猜疑心も手伝ってか、不意に心変りがする。即ち「ここから六歩のあの広間に二十もの額縁に入った絵が懸っている。そこには生命以上の生命がある。所がまるで生命がないみたい。こんな絵が女王の周りに一面に並んでいる館にお生れになった女王を考えてご覧よ。なんだって？女王は世間をよくご存知だって？では言いますよ。あの絵に画かれた空想や事実、例えば巨人の戦や、神々の饗宴、議会の御偉方、水浴の女、狩猟、人間の眼を見張らせる丘の眺望、海の風景、草花や果実に到るまであらゆるものが画かれているのを女王はご覧になっていらっしやる。そして女王は宮中の外の事物と同様に、それらを現実そのものと思っていっしやる。その女王の姿を見て、世間を、人間をご覧になっていると言ったって、誰がそんなことを信じるものですが。絵に画かれたものと、現に息をし、血の通っている生きたものを比較するために、静かな画廊のあの画かれた獅子の傍に生きた獅子を持ち込んでみなさい。女王は落ち付いてご覧になるかしらん。『彼処のあれは狩猟の絵と同じ仲間ね。何度も振り返って見たのよ』と平気でいらっしやると思いませんか。わたしはそうではないと思う。女王の今迄の世界、今迄の浮世に就いての知識、例えば女王の希望、恐怖、関心、同情は、わたし達の世界からはずっと掛け離れたもの、ずっと隔たり、ずっと現実離れたものに違いないわ。わたし達の真実は、宮中の外側の現実の世界にあるが、女王の真実は宮中の四つの壁の中の生活だわ。あの生活はどう見たってわたし達という真実の生活ではないわ。あの父、あの母は始めから終りまで真の父、真の母でないわ。友達は山ほどあるし、愛する人に事欠かぬ。時機が来れば夫も出来る。でも何れも此も幻みだいなものだわ。画家ルーベンス〈Peter Paul Rubens〉によって画かれた無から有るべき姿に画かれた理想の親切、友情、愛であって、みんな真物のそれらよりも立派で壮大に見えるけれど、唯一つ肝心の生命というものが無いわ。人はそれらの絵を嘆賞する時、只の布地とそこに塗られた絵の具を感じるだけだわ。女王にしたってどうしてそれらに肝心の生命を感じなさるのですか。こうして五十年間、唯独り絵を見て暮らして来られた。この女王にあなたは温かい身悶えする愛の誘いを突然なさろうとしている。女王の心が動揺しないと思えますか。ここに真実というものがあるのよ。女王は一目でその真実を認められ、それを絵の誠実よりもお好きになられるわ」と。

(3) 権勢に目も呉れぬノーバトの愛

コンスタンスの言葉に対してノーバトは言う。「女王は女王、僕と関係ない。僕は僕自身だ。僕は絵ではない。僕はルーベンスによって画かれた無から画きだされた生命のないものではない。すべての神経とすべての筋肉において生きている。また絵の耀く画廊の宮殿の窓辺に生きてもいれば、人民の通る街路にも生きている。生きる仕合せは僕達にとっては尊いことだ。そなたは女王が僕を愛するようになると言うが、女王は僕を愛することなんかできるものか。一年前そなたを見た時、僕の心は一つの声を聞いた。その声に応じてそなたを得るためにはどうすればよいかを考えた。その時そなたが女王の従妹であることを知った。それでそなたを得るために女王に仕えた。そして他の臣下のやれぬ事を僕はやってのけた。女王は僕の胸の内を探ろうとはしなかった。僕も胸の内を明かさなかった。女王には女王の仕合せがある。僕には僕の報いがある。それでその報いとして僕にそなたの名を呼ばせて欲しいのだ。結婚の約束を実行してくれ。それも今してくれ」と。するとコンスタンスは鋭く抗議する。かの女の激しい抗議にノーバトは男の意地を見せ、世間の考えとかれの考えの相違を述べ、その後にかれの真実の愛を情熱を身に漲らせて言う。「真実は強いものである。男の人生を真実のものにしたい。そして愛は僕の真実なんだ。僕の心から程遠い権力、名誉なんかの非真実は時が証をしてくれる。僕はそなたの刻印を僕の全身に押ししてもらいたい。そなたの名を僕の額と胸に、また剣の刃からリボンの端まで印してもらいたい。世間の人の見せ掛けだけの青白い愛なんか、僕の赤い情熱に触れたら顔色を失ってしまうのだ。世間の人の青白い愛の上に投げ掛けられている愛の恥辱を消滅させてやりたいのだ。僕の愛は余りにも永い間僕の体内で抑えつけられていた。でも今は僕の五体に食い込み、五体の全部を占め、その望みを遂げたに違いない。僕のやっていることを考えてみてくれ。そしてまたそなたに対する僕の感情の激しい動きを考えてみてくれ。僕は死んだ後も生れ変わる。死もこんな永い間のいやな日々のおとでは生と同じだ。生の必要性を死から解き離し、美しいものに与えるのだ。今宵こそ好機である。今宵は僕達が憧れ、手が届きそうに見える向うの震える最初の星に思いが募る。盛り上がるとうとする大地と低く垂れようとする天との間に何も無い。自然のすべては拘束から解き放され、すべての樹は思いのままに枝を投げ出し、自らの思いを追求し、すべての花も草も心置きなく振舞っている。そこには誇りも、恥辱も勝利も、敗北もない。すべては神しろしめし、ものみなそれ自身で計られている。僕達の周りの塑像はそれぞれ個々に独立し、強きは強きまま、弱きは弱きままに落ち付きを見せ、詩神はいつまでも堅琴を大切に抱えている。ニンフ〈nymph〉は仔鹿を連れ、サイレンス〈Silence〉は薔薇を持っている。そして神は宇宙をしろしめす。僕達もそうし

ロバト・ブラウニングの悲劇「露台にて」

よう。真実と調和したこれらのように生きよう。僕達は真実そのものだから。僕の第一にすべきことはそなたを僕のものにすることだ。音楽は行進曲を始めた。僕は行こう。彼処に女王がおいでだ。僕は行ってそなたのことを頼もう。その結果を人々は目撃し、驚き、称賛するだろう。僕達の人生の花は綻びる。僕はじっとしておれない」と。かれの熱烈な言葉にかの女は負け、かれに策を授けて女王の許に行かせる。

(三) 女王とコンスタンス

(1) 女王の姥桜の歎き

コンスタンスの授けた策を胸にして、ノーバトは女王の許に行き、女王と話す。やがて音楽が聞えて来る。それと同時に女王が現われる。女王はコンスタンスに歩み寄り、ノーバトの話の真偽を問う。かの女は本当だと答える。女王は最初はとも嬉しそうに、しかしやがて淋しそうな様子を見せて次のように言う。「そうだったの、そうだったの。でも皆の人が言うのよ。いや空想が言うのよ。『ここで生まれ。お前の人生はこれまでだ。お前は年老いた。遅すぎる。お前にはもう恋はない。恋するには遅すぎる。恋は若い女に任かせるがよい。女王で満足し、恋はコンスタンスに任かせて置け』と。でも曾て私も恋心をひよいと覚えたことがあり、その時その気持を恥かしいと思いつつ、子供の半ばそれを本当と思ったのよ。でもその後はいつも『ああ、いかにも恋は恋だが、恋なんか二度とと思うな。私は女王である。恋なんか止めて国を治めることに専念するがよい』と思ったのよ。それで顔もこんなになってしまった。髪もね。また手もこのように惨めに痩せてしまったわ。でもまた思えて来たのよ。『私はまだ終りじゃないわ。恋なくして人生の幸福なんてないわ。恋なくして幸福に思えるものは恋から投げ掛けられた影にすぎないわ。恋がそれを色取り値打ちをつけるのだわ』と。そして尚も続ける。「ああ、でも心配だわ。あなたは私をじっと見て心の中心で言うでしょう。『あの方老けてしまって。元々決して美しくもなかったが、すっかり醜くなって。男は矢張り美人が好きだわ』と。矢張りそうだわ。心配した通りだわ。忌まじい。思った通りだわ」と。その時ノーバトの姿をちらっと見て、女王は平素の淋しさをちよっぴり覗かせたのちに、姥桜の心の奥の遺る瀨無い気持を吐露して言う。「あのノーバトはとても優しく、若々しくキューピッドのようだわ。それに私は益々老け、肉体は痩せ衰えてしまった。しかし以前は私とあの人二人は触れ合うのを望む陰と陽の両極のようだったのに。ああ、コンスタンスもしあなたの周りに、脈打つ心と聡い目と役立つ手を持つ沢山の人がいて、あなたしか気にかけないとしたら、またあなたしか仕えないと考

えたり、あなたしか愛しないと云ったら、そしてまた、私にあなたと呼びかける若者が、生き身よりも大理石の像の方が好きだと褒め私を名指しながらも、而も最初に恋を囁いた女の頬を、踊り子の頬を、ジプシーの頬を、街の夜の女の頬を求めて去って行くとしたら、それはどんなに私には悲しいことだろうか。またそうだわ。人々が私に聞えないようにひそひそと話をしたり、私を驚かさないように足取りを忍ばせるのを聞いたたり、また私の女王の身分を恐れて伏し目がちになり、私が身に付けている宝物を捧げ持つのに懸命に尽してくれる男の手を見た時、私はどんなに歯ざしりしたことか。然るに一人だって列を離れ、話をしてくれたり、不躰な愛の手紙を寄越したり、私の手を把え、普通の人の手にするのように私の手を握り締めてはくれなかった。また番兵が私に敬礼するために戈槍を低くし、それを勇敢に投げ捨てて、私の膝を抱いてくれたら私は腰を低くめ心から接吻したかったのよ」としみじみと姥桜の心の深奥の儂い夢を打ち明けた。そしてノーバトとコンスタンスの恋仲も察しているとして次のように言う。「ああ、コンスタンス、今、あなたは私を愛することよ。私すべての苦しみを越えて思ったの『あの方にそれを差しあげよう』と。コンスタンスを仕合せにしよう。私の青春の花を、ありし日の私の女そのものを、恐らく私の最も幸福だった女そのものを。二人に喜びを与え、私はここに残ろう。そうだわ」と。

(2) 女王の老らくの恋

これを聞いたコンスタンスは「有難いことですわ」と言う。すると女王は意外な返事をする。「所が今のこの言葉が私の口から出掛かった時あの人が激しく私の言葉を遮ったの。私は、その遮りの言葉を、あの人の努力の報いとしての正当な希望の申し出だけを聞かされると思ったの。すると、ああ、私どうしてお話できませんよう。あの人の努力したのはみんな私を愛するためだったのよ。それを聞いた途端、私は目が眩み耳に雷が鳴るようだった。あの私を愛してたの、始めから終りまで私を愛してたの」と。これを聞いたコンスタンスが女王の聞き違いではないかと言うと女王は「いえ、いえ、聞き違いなんて？フン、聞き違いなんかしないわよ。あなたは私の影だったのよ。どうして分かったって？あの人言ったわ。あなたは私の造りリボンみたいだって。あの人私の手に接吻し、私の目をじっと見詰めたわ。そして言葉の切れ目毎に愛する、愛するとあの人言ったわ。恋が始められたのよ。大したことが降り懸かっているのよ。……私とても老けてるかしらん。この髪の毛、早くから灰色だったの。でもさっきの嬉しさが、今、髪の毛を黄金色にしたの。そしてまた、その嬉しさのために、頬の紅も元通りになるようだわ」と言い、ノーバトに就いて「結局、あの人はあなたの恋人ではなかった。あの人が見詰めたのはあなたではなかった。あなたがあの人を

見詰め、あなたが言葉付きや素振りを思い違ひしたのじゃないの。あの人言つてたわ。あなたは私の影だつて。でも本当のことおっしゃい。あなたはその人のこと一言も私に言わなかつたわね。ねー、私はあの人を誰にもあげないわよ。吃度よ。今ではあげないわよ。あなたにだつてあげないわよ」と。更に女王は「ねー、私は年取つてはいますよ。でも道化をやつたり、自分を欺いたりしたくないのよ。そんな事をすれば万事はお終いだわ。あなたの頬と私の頬を比べてご覧。ああ、どんなに違ひているかはお月様が見ていなさるわ。でもそれでこそ私は私の一生をこの機会に賭けるのよ。最後の最上の機会に賭けるのよ。私にも残されているじゃないの、私の心が、私自身が。女はすべて若くても年取つていても、立派な男を愛するものよ。それはすべての物語にあるのよ。若い美人は愛してくれる老詩人を愛するものよ。どうしてあの人私の心の中の詩を、愛を、情熱的信頼を、犠牲心を、貞節を愛さない筈があるうか。私はそれらをおの人の足元に投げ出すわ。誰が噴水の像だけを見ることを望むのですか。泡を噴き出し刃り一面に虹を作る海神の像であろうと、またニンフの像であろうとそんなものを見ていられるものですか。あなただつて空っぽの巻貝を本當に誉め称えることが出来ますか。私だつて身の隠れてしまう程愛の洪水を身に浴びたいわ。男つて、愛してくれる女を愛しないかしら。曾て僂儂の小人の詩人を愛した女王は誰だつたか。ああ、女はそうすることが出来るのよ。男達は言つてゐるよ。若い頃には多くの女を愛し、年取つては好きな女を愛すると。而も立派な男はその友達に言うのよ。永く続く愛は美貌の女でないよ。だから男は美貌の女を一日愛すれば、翌日にはそんな女に飽いてしまうのよ。結局、男は心が好きなのよ。要するに男は女王を愛するのよ。男はみんな女王を愛したいのよ」と。するとコンスタンスはノーバトは女王を愛してはいない。それは、女王が既婚者であり、身分が高すぎるからだとする。これに対し、女王は自らの結婚は不幸な結婚でただ名目上の結婚であり、それ故に苦しんでいると言う。「私はこの胸の苦しさを遠くへ追い払いたい。私は女王としての威光を役立てて、押しつけられた禍から私の青春を見事に救い出したい。あのいやな結婚を解消し、神と人の面前であの人の、あの人自身のものになつてしまいたい」と。コンスタンスは驚く。女王は言う。「有難いわね。お前さん驚いたりして。あなたの顔は美しい。でも心なら私を見るがよい。私の心は強いよ。教えて上げるわ。今迄随分永い間、充分に辛抱し耐えてきたのよ。世間もそう言つてくれるのよ。今、私が自分の思い通りにしても誰も非難しないと思うわ。この思いもよらぬことが、私の不幸な結婚の縛れを解いてくれることを私はとても喜んでゐるのよ。これ以上うまく望みを叶えてくれるものなんてないわ。神がわざわざ送つて下さつたのだけ。もしこれが人民の為になるなら、こんな好都合に行くことなんかまたとないわ。私は、今、感謝して黙つてお受けして、ただ神さまにお祈りするだ



けだわ。でなければ私は生涯の最後まで順調に行けそうに思えないわ。そうだわ。私どんなに障碍を挫き、不運を追い払えるかしら。私どんなに強いかしら」と。コンスタンスが女王の思い切った言葉を不思議に思い狼狽するを見て、女王は、コンスタンスも亦思い切った恋をするようにと諭し、而もノーバトには手を触れないようにと言わぬばかりの口吻を示すに及んでコンスタンスは呆氣にとられる。併し女王は続ける。「ほんの一寸前、私は、恋など諦めて死のうか、それとも独りぼっちで暫く死ぬまで暮らそうかと考えていたのよ。そしてこの考えをあなたの耳に聞かせ、また私の耳にも聞かせ自分を納得させようかと思っていたのよ。所が今では、新しい生命と新しい王冠のこの恋で世間をあっと言わせたのよ。私は部屋を歩き廻ったり、引き返えしたりして考えたのよ。私のこの気持どんなか教えてあげよう。どんなに速く神の微笑が世間を変えることだろうか。今迄暗かった世間が、神の恵みの私の恋でどんなに明るくなることか。あの人と私がどんなに幸福になることか。どんなに仕事が遊びになり、今迄の不幸がどんなに勝ち戦と変ることか。本当に私は永い間、年月を無駄にしてたわ。それにどうでしょう。まだ年月は沢山残っているわ。神さまは大変ご親切だわ。これは夢じゃないわ。絵画、彫刻を見ての冷たい静かな心で、人間の幸福を推測していたのとは違うわ。この大理石の像が肉や血と違うように、これは月の女神が人間に下さる慰めだわ」と。ここで女王が退場し室内から舞踏会の音楽が聞えて来る。

#### (四) 青春の恋と老らくの恋

##### (1) 一生に一度の真剣な青春の恋

女王が退場するとノーバトとコンスタンスは互の愛に就いて色々と語り合った末に、結局、かれは、二人の愛を誰にも恥じないものにしたと断言し、男というものは一つの目的達成のためには全力を集中すると言う。するとかの女は「詩人や芸術家は貧乏に我慢し、金儲けする人を哀んでそうしますわ。その気になればあなたも詩を書き、絵を画くこと出来ますわね」と応じる。かれはこれに対して「しかしかれらは自分の恋人を愛することをしないんだ。僕はそんな真似はしない。そなたは、そなたと僕の間が存在するがままのすべてを最上のものと信じてとだよ。僕は他の誰にもないほど仕合せなんだ。僕は実人生に生きるんだ。かれら詩人や芸術家は人生を実験しているだけなんだ。かれらは実人生を離れて遠くから実人生を眺めているんだ。僕はかれらから眺められるものになろうじゃないか。僕はそなたの顔を見て本を書く

ロバト・ブラウニングの悲劇「露台にて」

と思えば書けるし、絵を画こうと思えば書ける。併しそれを僕は何の目的で誰のためにするというのか。広場で高く空中に聳え立つギリシャの美の神、あの青白い芸術の女神の像のどれが、自らは悲しく笑いながら、繊細な幽霊みたいな身体を、<sup>からだ</sup>どうして現実の血と息即ちその女神自らがいつも軽蔑する美しい生命を養うことができるものか。④⑤。そなたはそんな像じゃない。そなたは僕のために創られたのだ。この世の他の誰のためでもない。また僕の芸術と呼ぶ所のもののためじゃない。またそなたがいかに美しいかを凝視するあの冷たい静かな芸術家の力のためでもない。僕はそなたの許へ来た。僕はそなたの許へ来たからには書くためにも、画くためにもそなたから離れはしない。そなたは僕だ。僕はそなただ。僕達はルーベンスに僕達を画かせようじゃないか」と。更にかれば、かれが国政に奔走したのは権勢を得るためではなく、かの女を自らのものにするに相応しい身分になるため、人民の意志に従って自らの天性を働かしたにすぎなかったことを詳細に述べ、その言葉の結びに「ああ、僕の胸の情火が最後に栄冠を得たように、僕の情火の教えた理性の目的も栄冠を得たのだ。僕の意志は人民の意志なんだ。僕はただ人民の意志に従ったまでだ。それからの僕は緊張、陶器師の粘土との格闘、永い間の不安な跳きであった。この精神的苦闘の出来上りの成功が、神が笑を<sup>えみ</sup>湛え口を丸められる素晴らしい壺<sup>つぼ</sup>なんだ。そしてその壺には美の女神の踊る姿が綺麗に浮彫りされ、人民はそれを見てやんやと絶賛し、会心の笑を漏らすんだ。このようにして僕達の栄冠はいつまでも栄冠そのものを新らたにするんだ。僕達の栄冠はいつもより高く、より高くへ進められ終りなく、いつも努力が始められ、続けられるんだ」と。

(2) 老らくの恋は青春の恋に勝てず

所がコンスタンスの胸に突然女王に対する同情の心が生じ、熱愛しているノーバトを女王に譲ることを本気に考え出し、種々の言い方をして懸命に喋り立てる。そこで女王は「ノーバト、この娘のやることをあなたは向う見ずとお思いでしょうが、私もそう思います。あの娘のあの憑<sup>つ</sup>かれたような空想、突拍子もないお喋り、機嫌の変り易いこと、頭も大いしてさえてもないのに、いやに大胆すぎることなどね。でもそれがあの娘には似合っているのかもしれない。今夜のことすべて奇妙なんでも。でもこれが当り前のことかもしれない。というのはあの娘の言うこと本当ですものね。あなたがたった今、愛の献身のことに就いてお話になったこと、突然に私に恋心を掻きたてたのでなくして、ずっと以前から感じていた愛情を正当なものにして下さったのです。私きっぱり申します。始めから私はあなたを愛していたんです。そしてとても不思議なことに、私に今迄にも増して力が出て来たのです。結局、あなたの勇気が私を力づけて下さったのです。今夜、十二ヶ月のお骨折の最

後を飾る今夜、よくもお話下さいました。でもあなたの心が分かるのにそんなに永くは待ちませんでしたのよ。本当ですよ。あなたがとても熱心であった原因に就いては最初から私にははっきりしていました。たった今、真実をお打明けになったあの言葉がなくともはっきりしていたのです。これは大変不思議ですけど、私の愛があなたの愛にぴったり溶け込んで幸福な結果になりますわ。あなたが私を選んで下さったんですもの。私もあなたを選びます<sup>④</sup>と喜びの絶頂に達する。ノーバトは「忝なくもお選び下され有難く存じます。お眼鏡に叶わぬことのないように致します。わたくしはご気性に合えます。併し女王さま、コンスタンスがわたくしの心に創った愛は、女王さまでもわたくしの心にお創りになることはできません。稍悲劇的に響きますが、より本当に近いことを比喻で申し上げます。彼方の芳香を放つ素晴らしい木蓮の花が、ある昆虫を誘うとします。だがその昆虫は地面でもっと間近に咲く可憐な雛菊を選びます」と言う。驚いたコンスタンスは「お止しなさい。誘いのかけたのは女王さまではない。お止しなさい。その思い違いは何よりもいけないわ。それはわたしだったのよ」と言う。ノーバトは驚いて「それなただったのかい。それなら、僕にそなたを与えてくれる最も神聖な時の恵みさえもないことになる。それなら、僕はそなたを許してはおけない。併しそなた、可愛いそなた、僕を知っているそなた、こんな永い間僕の心臓の高鳴りを語り、その純白な手に僕の生命を把握していたそなたが。それはよくない<sup>⑤</sup>」とノーバトはすっかり腹を立て、心にもない自棄言辭を弄して最後に言う。「僕はたった一度の生涯にたった一度の恋をしたいのだ。これは、あれやこれやと考えたり、話したりすることじゃない。僕にははっきりしていることだ。それは僕がそなたを愛している事実なんだ。僕のそなたに対する愛を殺してしまう試みなんて。こんなやりかたで僕達の間が少しでもよくなるか。コンスタンス、そなたも知っての通り、肉体と靈魂はそれぞれ生命を持ってはいるが実は唯一つなんだ。ここに僕の愛が現存し、そなたの足許に生きづいているじゃないか<sup>⑥</sup>」と。これを聞いてコンスタンスは安堵の表情をし「ちよいと、女王さまのあのご様子をご覧よ。あなたはわたしのこんな冗談を本気になんかして。そんなに真剣にわたしを愛して下さるのなら……」<sup>⑦</sup>と言う。ノーバトは真面目な面持でそれに応じ「ああ、冗談はここでもう止めてもらいたい。冗談が終る笑いは何処にあるのか。僕に明瞭になってくるこの恐怖は何なのか。女王さま、なぜ露台の手摺りをそんなに握り締めておいでなのですか。何かわたくしがお気に召さぬことを致しましたか。わたくしは本当のことを申しあげなかったでしょうか。どうしてわたくしに本当のことを申さないなんてことができましようか。それはわたくしを試めし、コンスタンスへの愛はどうであろうか。とお試めしではなかったのですか。女王さま、女王さまのお心が、かくわたくしが選ばねばならぬものを第一に承諾なさったのです。所でこ

ロバト・ブラウニングの悲劇「露台にて」

んな嗚はなしがございます。誰だれかが一人の乞食こじきをつかまえます。そしてかれにその子こをいくらで売るかと問います。その乞食は予期した通りに勿体もったいをつけて冷笑こらうを返して来るのです。コンスタンス、話はなさない。僕は乞食こじきだ。へー、これは何んだ。あなた方二人は互たがひに豹ひょうみたいに睨にらみ合あったりして、コンスタンス、世は色褪あせ、そなただけが其処そこに立たっている。そなたは今夜のどさくさ紛まれにそなたの心の中の心なる僕をどんな値段ねだんでも売ろうとしたのではなかつたかい。そうだ、そうだ。そなたの心を推察すいさつすることは易やさしいことだ。この無駄なそなたの自己犠牲じこぎせいによって、僕の愛の上に出ようとするそなたの愛の狂おしい試練しれんだったのか。よかろう。でもなあ、僕はそれを忌いまいましく思おもいながらも、僕はそなたを愛するよ。僕は愛そのものだ。僕の愛は変かることは絶対ぜったいにない。この愛そのものがそなたの足下あしもとにいるんだよ」と。この時女王は退場する。コンスタンスは言う「わたしの胸を触ふって下さい。そしてあなたの胸に当あたって心臓しんざうの鼓動こどうを抑おさえて下さい」と。ノーバトは言う。「僕の胸に当あたてつかい。これが生命せいめいというものの絶頂ぜつていというものだ」と。ここでコンスタンスは感窮かんきゅうままって言う。「わたしはあなたのものよ、あなたのものよ」と。ノーバトもそれに応こたじて言う。「そなたと僕、僕達は此処ここ迷宮めいきゆうの真まっま只中ただちゆうで何なにといううねり道みちで、どうしてかくも悩なやまされたのかなあ。でも人の中には、この僕達の栄冠えいかんの地を求め、途中で死しんだ者もある。然しかるに僕達はそれを見つけたのだ」と。コンスタンスは嬉うれしさの余りに言う。「ほんと見つけたわ、見つけたわ」と。ノーバトも嬉うれしく思おもい「愛いとしいコンスタンスよ、女王が何となさろうと恐おそれるでないよ。もう僕達は傷やつきはしないよ」と。ここでコンスタンスはノーバトに感謝かんしゃする。その時ノーバトは言う。「この仕合せはこれでお終しまいに違ちがいない。余りに完全かんぜんすぎるもんもんな」と。かれがこの言葉を言い終しまった時コンスタンスが突然とつぜんに言う。「彼処あそこの音楽おんがくも止やんだわ。なんと慎重しんじゆうな、重々あしどしい足取あしどりなんでしょう。一つの輝あきがわたしの周りに、またわたしの心の中に」と。これに應こたじてノーバトも言う。「死しのようなものが、僕達のこの情火じやうかの周りに急に指ゆびを伸のばし、僕達を周囲しういのものから離はなしてしままうだろう」と。ノーバトの心のうちを察さつしたコンスタンスは「それでいいのよ。今扉あが開あくわわ」と。かの女の言葉によって扉あに目めをやりノーバトは言う。「衛兵ゑいへいがややって来るぞ」と。その瞬間しゆんかんコンスタンスは情熱じやうねつを込こめて言う「接吻せつぶんしてよ」と。

(五) 結 び

この劇は若い男女のノーバトとコンスタンスの青春の恋が女王のノーバトへの老らくの恋に勝つという筋である。老人が若い女に、或は老女

が若者に恋をし、そのいづれの場合でも若い方に恋人がある時、老人、老女が敗者に終るといふテーマは古来からよく取りあげられるものである。故にテーマに関する限りでは問題はない。併しこの劇は未完成の劇である。ブラウニングは最初、三幕か四幕の劇を計画しながら、計画通りに完成せず場面が一つの露台だけの劇に終わっている。これは遺憾であり、而も登場人物の動きが余りにも少ないのも物足りなく思える。またコンスタンスが体面主義を翳してノーバトに迫りながら、やがては女王の心情に同情し、自らの恋人を女王に譲ると言い出す件などメロドラマ的で面白くはあるが、悲劇の緊張に水を差す感がある。これらはこの劇の欠点である。併しこの劇の進行を僅かの時間に圧縮し、情熱の炎を燃焼させて三人の登場人物の危機的局面を克明な心理解剖によって演出する所はこの劇の長所と思われる。底抜けの善人ノーバトの純情、洞察力はありながらも、女賢しうして牛売りに損う式のコンスタンスの猜疑的浅知恵、女盛りを過ぎ身瘦せ衰えながらも過去に果たし得なかった恋心を回復し、老らくの恋に陥るも、やがて破局に導かれ行く女王の哀われにも痛ましい心情などの心憎いばかりの台詞は流石にブラウニングの筆の冴えを示すものである。特に女王が、宮廷の画廊に並ぶ芸術作品によってのみ理解している抽象的な愛から、若者ノーバトの出現によって、血の通う現実的の愛へと心が扉を開かれ行く女王の心の動きの台詞、或はコンスタンスがノーバトを体面主義者と疑うに對し、かれが人生の眞実はかの女に對する愛のみであって、他の一切はかれにとっては非眞実とするうブラウニング流の恋愛至上の台詞はこの劇ならではのと思われる魅力がある。次にこの劇の読後わたくしの心底にいつまでもこびりついて残るのは、姥桜の女王の心情である。女王は不幸な結婚による癒えぬ心の渴きを抱え、かの女の一日一日は眞の幸福を求めての苦悩の日々であったであろう。併し躓きながら、惑いながら何とか今日迄生きて来た。けれどもかの女の心の片隅には女の熱い血が尚も残っていた。それが故に、過去の不幸な結婚を解消し、今一度眞剣な恋をし、女の熱い血を燃焼させてみたいとの情熱に溢れていたのではなかったか。身心共に最も成熟の花の時代でも稍もすれば途惑い続けるのが女心である。然るにかの女は今や姥桜、髪は灰色に変わりかけ、皮膚には皺が増し、手足の動きも緩慢になり、やがては老衰の域に達し、死が目前に迫るのも遠くない心の状態に置かれている。この心境の女心に微かな救いとなるものは、あらゆる希望を失いながらも、過去の懐かしい思い出にいらしくも帰って行くことである。在りし日の青春の美しい自らの姿態に想いを寄せることである。それは一面悲惨ではあるが、而も奇妙に美しい女心である。というのは老いの悲惨も過去の青春に想いを致す瞬間に何か新しいもの、言わば新しい生命が老の身に甦るからである。外面的、肉体的には老いはそのままであっても、内面的、心情的には、目に見えない生命の躍動があるからである。ここに肉体的に移る行くものに一つの

### ロバート・ブラウニングの悲劇「露合にて」

救いがある。かくして女王は若いコンスタンスとノーバートの二人に老らくの恋は破られたことは哀われではあったが、またかの女の心のうちに生命の鞭りを得たことは、たとえ一瞬とは言え、かの女の仕合せというべきではなかったか。アーサー・シモンズが「女王はその性格に於いてはコンスタンスに似るよりはノーバトに似て単純、孤独であり、極めて悲劇的、極めて哀われを催す人物である<sup>㉔</sup>」と言っているのは適切な言葉である。

#### 〔I〕註

- ㉑ かれが国事に奔走したのは、元来、女王に恋していたからであると持ちかけ、それはあまりに畏れ多いからせめて女王の影であり、リボンである従妹を賜わりたいと申し出ること。そうすれば女王はかれから恋されたことを喜びながらも、臣下との結婚は女王としての体面が許さぬと考え、かれらの結婚を許可するであろうと勧める。
- ㉒ 女王は先きに心に染まぬ結婚をし、而も女盛りも既に過ぎていた。しかし内心には女と生れたからには心からの恋を一度はしたいとの希いがあり、男性への愛に饑えていた。そこへかれの愛の告白を受けたので、すっかりそれを信じてしまったのである。
- ㉓ コンスタンスはノーバトを深く愛することに変わりはないが、女王のあまりにも哀われな心情を知ると、今迄世話になった従姉女王のこととて女王に同情し、且つはかれの将来を思い、自らの恋を諦めて、かれを女王に譲ろうとする。
- ㉔ この点については二つ見方がある。即ちノーバトとコンスタンスを処刑するために来る衛兵の足音とするのと、女王が激しい衝撃を受けて斃れたので女王の死骸を片付けるために動く衛兵の足音とする見方の二つである。わたくしは前者を取る。尚この詳細については Edward Dowden: *The Life of Robert Browning*, p. 66 参照のこと。
- ㉕ ローマの Plautus の喜劇がこのテーマを取り上げ、フランスの Molière の喜劇の多くがこのテーマを扱っている。イギリスでは、Malory, M. Arnold, Arthur Symons, J. Masefield が扱った *Tristan and Isolde* がこのテーマである。Wagner の楽劇もこれである。またフランスの Beaumarchais が書き、Rossini がそれを歌劇にした *The Barber of Seville* がこれである。
- ㉖ 拙著「ブラウニング鑑賞」第五章劇的独白詩「アプト・ヴォウグラウ」及び第七章劇的独白詩「アンドレア・デル・サルト」参照。
- ㉗ ブラウニングは浪漫主義詩人として理想に憧れながら、他面では実生活を重視する二重性を持つ詩人であった。というのは、かれが客観即ち自己の外に求めるものは理想的なものであったが、主観即ち自己の内を求めるものは、自我的であり、自我的の中心は生活の充実であった。従って人間性の充実した実人生であった。これに就いては、拙著「ブラウニング鑑賞」第六章「クレオン」及び大手前女子大学論集第十号のロバート・ブラウニングの劇的独白詩「フラ・リボ・リピ」参照。
- ㉘ 次の引用文の前に次の言葉がある。「ではもう一度、そなたの手をかしてくれ。そしてそれを僕の額がどんなにどきどきしているかを見てくれ。またその手を僕の目の前に翳して僕の眼からどんな情熱の炎が燃え出しているかを見てくれ」 Robert Browning: *In a Balcony*, ll. 1-3 これによって次の台詞がいかに

情熱的であるかが予想される。

㊤ *ibid.*, ll. 4—8

㊦ コンスタンスは当時の新しい女で、しかも気性の激しい女であった。そのため世間の習慣や宮中の仕来たりとかに従うことを心よしとせず、男女の恋は男女二人の貴重な宝で二人だけの胸に納めて置くべきもの、従ってその恋心の燃焼の結果の結婚も他人の介入を許さず二人で決めるべきものと考えて腹を立てたのである。

㊧ 肉体的関係が既に結ばれていることを示している。

㊨ Robert Browning : In a Balcony, ll. 19—34

㊩ *ibid.*, ll. 51—72

㊪ *ibid.*, ll. 103—114

㊫ 一つの声とは次の言葉である。「あそこあの女、かの女を得なければ人生は無用だ。地上の種々の悲しみを一つに束ねよ。そしてそれを忍べ。地上の喜びのすべてを束ねて捨ててしまえ。だが唯かの女だけを得よ」

*ibid.*, ll. 157—161

㊬ *ibid.*, ll. 148—179

㊭ ノーバトがかの女との結婚を望むのなら、二人だけで質素な、しかも愛情の籠った恋人同志に相応しい結婚をすればよい。それがたとえ宮中の掟に背き、死刑の宣告を受けても構わない。然るにかれはわざと女王の許可を求め、大袈裟な世間的な結婚をしようとするのは、かれは矢張り世間体、体面を求めている。なんと平凡な男だろうか。真剣な恋など出来る男でないと言い更に言う。「この一年間の人目の多い中での夢のような喜びはみんな水の泡なの。あなたはこれを捨てて、旧式の、おっぴらな、世間的な、並の仕方、妻をいじめ、妻を売りとばすやり口をしたいの。何があなたを惑わすの。あなたがわたし共の幸福を恥かしく思うのは、かれらの大袈裟に言い触らす幸福なの。……わたし共はこれまで世間の懸けた罫を潜り抜け、こっそり会っていたのに。あなたは世間の許しを乞うがよいわ。鷹に足輪を嵌るがよいわ。天性に従っていたときの、ずっと前は大胆で敏捷で世間の目を逸らしていたのに。世間に許しを乞うのを義務とすると言うの。そうしたければそうしなさい。ああ男の考えなんてそんなの。女はそんな馬鹿じゃなわ *ibid.*, ll. 195—212

㊮ かれの考えの相違とは次の言葉である。「いや男の考え、そして僕の考えは普通人の考え以上なんだ。……僕は世間の人に褒めてもらいたくはない。僕は拘束に遮られ、決った型に邪魔され、また秘密を強いられ、盲目とされる窮屈な役人生活をしたが、この生活から、僕の愛を自由にし、僕の人生にどんな愛が果たせるかがみたいのだ。どんな愛の籠った生活が芽生えてくるかがみたいのだ。ところが世間は、僕が今言ったのと異なる立場からする仕事、即ち権力、名誉を得るための仕事と思っている。そして世間は、世間と異なる僕の立場を低級な立場と思っている。しかし僕は世間の高級な立場を恥ぢさせてやりたいのだ」

*ibid.*, ll. 213—223

㊯ 「僕のやっていること」とは次の言葉である。「人目を忍ぶ恋の悩みを、希望と心配を、不意に会えたかと思うと不意に離れたこと、最後に確かな成果を収めるまでのおずおず、びくびくの真剣な辛抱強い久しい間の努力を」 *ibid.*, ll. 235—238 これと同じ言葉がコンスタンスにもある。即ち「もし、わたしが最初

ロク・ノ・ハカリ・ハクノ・シヅメ「鱧和豆」

からあなたを愛していなかったら、もしわたしがあなたのものでなかったら、そしてもしこのように人目を誤魔化し、大胆にうまい具合に抜け出すことができなかったなら、あなたはどのようにじっとしてられないのよ。ここ宮中の内や外の人達がわたし達のことをどう思っているかあなたは知っているの。今あなたが何処にいるかわかっているの。もしわたしがあなたを愛していなければ、あなたは国事に気を揉んでこんな処にいない筈よ。わたしもよ。もしあなたを愛していなければ今、何処にいるかわからないわ。恐らくお祝の衣裳に夢中になっている筈よ。ところが二人は死の広ろげた手の下で抱き合っているのよ。廊下で一瞬会うために会議をふいにしたあなたのあの思い、あなたのあの心配は何のためだったの。それから、また、人に気付かれないうようにとの突差の早業、永い間の秘密、窺かな企み、用心深い示し合せ、永い間企んで、ひょっこり会う逢い曳き、危い目配せ、『女王はご存知なの、それともご存知ないの、わたし達助かるの、駄目なの』と心配したことなど」 *ibid.*, ll. 180—194 この二つの引用文は恋人同志の逢い曳きの情景が巧みな言葉で幾つかの場面を表現して舞台をぬきにしながらのブラウニングの表現力を示している。

㉔ *ibid.*, ll. 224—265

㉕ 註①の策

㉖ *ibid.*, ll. 359—376

㉗ *ibid.*, ll. 387—340 この引用句を Josiah Flew は女性に対してのみ言ったのではなく、すべての人間について言ったのだと指摘している。 Josiah Flew : *Studies in Browning*, p. 138

㉘ 平素の淋しい気持とは次の言葉である。「あの方見えたわ。来られるのは不思議でないわ。私は男の人達が行ったり、来たりするのを立って見ていただけかしらん。今迄私はよく、やがて私が大理石の像になるその台石からじろりと目を向けたの。そして言ったわ。『若者が一人（ノーバトのこと）増えたわ。あの人も誰かを愛しているだろう。それは私には何の関係もない。あの人に大理石の像のような威厳だけの冷たい私なんか何の用があるものか』 Robert Browning : *In a Balcony*, ll. 392—397

㉙ *ibid.*, ll. 394—424

㉚ 女王は註㉙の言葉を言い終ったのちに「あの人（ノーバトのこと）は他の人が恥じ入るほどの、しかも他の人が今迄した何よりも値打ちのあることをこの一年間にしたのよ。そのことは何かということあなたは知っているでしょう。そのことを口にするのは実は私でなく、皆がそう言うのよ。それで別の苦しみが増えたので忌まましいのよ。かれが私に仕えた仕事の立派さを知ったばかりでなく、なぜその仕事が素晴らしいことであったかを知ったのよ。それというのは、かれの私に仕えた仕事は立派であった。ところがその仕事を立派にする刺戟になるもっと素敵なたががあることを知ったのよ。その素敵なたがとは、かれが誰を愛しているかということよ。それを私は見たように思えるの。コンスタンス知っているでしょう。私はずっと前から信じているの。あの人を愛していたのはあなたであるということよ」 *ibid.*, ll. 430—440 と。そして女王は更に言う。「あの人を視線を投げかける処にはいつもあなたの顔があの人に出会ったと私に思えるのよ。あんな風にする人はあなた以外の誰を愛するものですか。あなたはあの人をあなたを愛していることを知り、その愛を認め、あなた達互に示し合せていたように私には思えたのよ。あなた達は庭を歩くこともできず、この露台に入ることもできなかった。私をすぐにじりじりさせ、どうしても覚らせることなしにはね。それだけ、それは真実な、正しい、美しいあなた達二人に似合いのことと思えたわ。報酬を求める卑しい野心のためでなく、最後に今宵みた



いにコンスタンスとの結婚を許してというような」*ibid.*, ll. 441—454

㉔ *ibid.*, ll. 455—461

㉕ *ibid.*, l. 461

㉖ *ibid.*, ll. 461—469

㉗ *ibid.*, ll. 470—483

㉘ *ibid.* ll. 493—502

㉙ 註⑤参照

㉚ Swift に対する Vanesa, Dr. Johnson に対する Mrs. Thale, Goethe に対する Minua Herzlieb など。

㉛ AEsop に対する Rhodope か。

㉜ *ibid.*, ll. 503—533

㉝ *ibid.*, ll. 544—549

㉞ *ibid.*, ll. 551—567

㉟ 女王の口吻とは次の言葉である。「コンスタンス、あなたは私を見習いなさい。私のようにするのよ。あなたは若く綺麗だわ。私の一番可愛い子。あなたは沢山恋人ができるわ。でも一人だけ愛するのよ。髪の毛はノーバトのような髪の毛の人でなく、あなたの髪の毛に似合うような淡褐色の髪の毛の人で、丈はノーバトより高い人を愛するのよ。というのは、その人にはすべてを捧げるのよ。自分のことなんか考えないのよ。あなたの誇りも、望みも恐れもすべて投げ出すのよ。そしてただその人故に愛してあげるのよ。考えてごらん。そして今、私が私とあなたと比べたらどうでしょう。血の枯れた老人ではないかしら。でも一人のお方のためにすべてを投げ出すわよ。王冠も捨てるわよ。生命も捨てるわよ。みんな捨てて、ただ愛するだけだわ。あの方も屹度愛して下さると思うのよ」*ibid.*, ll. 569—580

㊱ *ibid.*, ll. 591—605

㊲ *ibid.*, ill. 658—660

㊳ ブラウニングの劇的独白詩「クレオン」にこれと同じ考えがある。拙著「ブラウニング鑑賞」の202頁から204頁のクレオンの言葉参照

㊴ *ibid.*, ll. 661—678

㊵ 詳細とは次の言葉である。「僕はそなたの心がわかる。そなたは実人生に生き、そして実人生に於ける僕の行動に、力量に、成功に正しく共鳴してくれる。僕の来たこの道は一直線なんだ。そして僕が幼い頃覚えた処世の技能を他のものに変えるには僕の今迄の人生は短かすぎたのだ。だから矢張り僕の覚えた技能を役立てたんだ。人民は、僕が人民を治め、人民を守り、干涸びた人民の生活に養いの肥料を施し、先ず人民に、それから僕に正当な一割税で自らの収穫を得られる今僕のいる地位に据えたのだ。結局、僕は、人民によって指定された仕事の割り振りで、誰かが果すべき勤めをしているにすぎぬのだ。僕は創造せよと命ぜられてはいない。僕には、人民が、創造を保証するために、僕の額に飾る星などは見ない。僕は創造するのではなく、人民の意志を一つにまとめて、そ

ロズ・トルカリスの歌集「鱈と魚」

れを実行することを命ぜられている。その人民に命ぜられた仕事を始めたにすぎぬ。今夜その仕事は終る。その仕事の成果は人民の温い心と驚嘆と同情に表われるとしたら、僕を国事に奔走するように僕の理性に教えた僕の最初のもの、僕のそなたに対する胸の情火はどうなるか。もし人民が、僕の第二の天性の黎明即ち人民が自己の意志に代ってその意志を実行してくれる新人を僕に認め、その人だけが知っている新しい高所への新しい道をその人が人民に発見してくれると信頼を寄せているとしたらどうなる。そなたが僕に接吻を与えてくれたとき、それを感じたのだ。われわれの言葉で言えば、この民衆をごらん。どんなに民衆が僕の命令を出す手に従順であるかをごらんよ。そしてごらんよ。その結果、僕の手がどんなに形づけられて行くかを。更には僕の傍にいるそなたが僕の手

④ *ibid.*, ll. 704—716

⑤ *ibid.*, ll. 797—819

⑥ 女王を暗示する。

⑦ ノーバトを暗示する。

⑧ コンスタンスを暗示する。

⑨ *ibid.*, ll. 819—837

⑩ *ibid.*, ll. 838—841

⑪ *ibid.*, il. 841—849

⑫ ノーバトの野糞の言辞は次の通りである。「もう充分だ。僕の頬が赤らむように思えるそなたの試めしなんて。世の中にこんな卑しい女ってありゃしない。こんな女とても愛せるものか。こんな女が僕を愛し、僕を恋していたと分かったら、そなたが僕を侮辱したように、僕も敢えてそなたを侮辱する。言えというなら、僕に言うことがある。『そなたが僕にくれた心を取り戻せ。僕は僕のもらった心は離さぬぞ』と。またこう言ってもよい。『そなたの手にまだ震えている心（まだはっきりノーバトに与えず、どうしようかと迷っている心）を取れ。そんな風にして支えられた心は僕には何の役にもたたん。どうか、そなたのご自由に、僕の友の誰かにくれてやってもらいたい」*ibid.*, ll. 852—861

⑬ *ibid.*, ll. 869—879

⑭ *ibid.*, ll. 880—882

⑮ 女王を暗示する。

⑯ ノーバトを暗示する。

⑰ コンスタンスを暗示する。

⑱ 女王がノーバトからコンスタンスを取り上げようとしたがそれをことわったこと。

⑲ もしこの場合コンスタンスだったらどうするかを言え、ノーバトはことわったがの意。

⑳ *ibid.*, ll. 882—903

- ⑥1 *ibid.*, I. 904
- ⑥2 *ibid.*, II. 905—906
- ⑥3 *ibid.*, I. 906
- ⑥4 *ibid.*, II. 906—909 この引用句を Philip Drew はこの劇の頂点の言葉と指摘している。Philip Drew : Browning, p. 405
- ⑥5 *ibid.*, I. 910
- ⑥6 *ibid.*, II. 910—911
- ⑥7 *ibid.*, II. 913—914
- ⑥8 *ibid.*, II. 914—916
- ⑥9 *ibid.*, II. 916—918
- ⑦0 *ibid.*, II. 918—919
- ⑦1 *ibid.*, I. 919
- ⑦2 *ibid.*, I. 919
- ⑦3 Arthur Symons : An Introduction to the Study of Browning, p. 134

〔Ⅱ〕 参考文献

- (1) Philip Drew : The Poetry of Browning, A Critical Introduction
- (2) Stopford A. Brooke : Browning
- (3) E. L. Cary : Browning
- (4) Josiah Flew : Studies in Browning
- (5) Arthur Symons : An Introduction to the Study of Browning
- (6) Willam Lyon Phelps : Browning
- (7) Osbert Burdett : The Brownings
- (8) Edward Berdoe : The Browning Cyclopaedia
- (9) Mrs. S. Orr : Handbook to Browning's Works
- (10) Edward Dowden : The Life of Robert Browning
- (11) 石田 憲次 } 註釈 Men and Women  
石川林四郎 }
- (12) 大庭千尋 ブラウニング・男と女

ロズー・トハカリハタの戯曲「露伴とト」